和服構成における割り出し法の妥当性について(第4報)

仲　村　洋　子

I　はじめに

和服を着装する人の体格・体型に適したものを縫製する手段として、人体測定を行うようになったのは明治以降のことである。そして、採寸した寸法を各部位に割り当てる方法を、割り出し法として記述した裁縫教科書ないしは裁縫書が刊行されるようになったのは、大正末期からである。これらに記載されている採寸箇所、割り出し方法は各書によって異なるが、おおむね、時代とともに採寸箇所は増大し、従って、割り出し方法が複雑化している。

これまで、私たちは各時代に採用されている割り出し方法によって、体型の異なるスタンを用いて着装実験を行った。そして、その結果を体型別に報告し、各書が採録している割り出し法の特徴を比較検討してきた。

検討課題として取り上げた主な部位は、身丈・衿下寸法・身幅・裄丈である。第3報[1)]において、標準体型のスタンを使用して着装実験を行った際、各書の標準寸法との違いが指摘してある。すなわち、裄はより長く、身幅はより狭くなりつつあるとして、脇縫の縫製が従来と異なり、一部に斜線を利用したことを記している。これは自然に抱幅が脇で広くなり、着装実験を行った結果、脇に布の余裕が多く見られ、これが裄丈に影響したことを把握した。

そこで、今回は標準寸法で試着衣を縫製し、和服における標準寸法とは何かを、問い直すとともに、各所・各部位の割り出し法の是非にせまることを目的として研究を進めた。

II　試着衣の縫製

1　着装実験に用いた和装スタン

スタンは前回と同じ標準型のものを使用した。

2　縫製に利用した裁縫書

着装実験に用いる試着衣を縫製するために利用した裁縫教科書、ならびに裁縫書は次の通

りである。

I 増訂 裁縫新教科書[2]（大正15年刊）

II 塩原式裁縫書[3]（昭和５年刊）

III 裁縫精義[4]（昭和11年刊）

IV 家庭科 学習指導の研究[5]（昭和48年刊）

V 最新和裁全書[6]（昭和56年刊）

VI 新被服構成学[7]（昭和59年刊）〔現代の和服[8]（昭和60年刊）〕

VIの『新被服構成学』は他の５種の裁縫書と異なり、大学・短期大学の被服構成学の教科書で、講義用、実験研究用の図書である。従って、標準寸法の記載がない。そこで、実際に縫製するにあたって利用した裁縫書は、昭和60年刊行の『現代の和服』によるものである。この書中の標準寸法を採用したのは、両書の内容に共通の部分が多く、ことに“寸法のきめ方”は同一著者が記載したものなので、38ページの標準仕立上がり寸法表を利用した。なお、『新被服構成学』の試着衣は、本書の実習編の記述に基づいて縫製したものである。

3 仕立上がり寸法

各試着衣に用いた仕立上がり標準寸法は第１表に示してある。時代とともに変化する体格を画一的に区分するのが標準寸法である。従って、その寸法に幅をもたせるようになったのは昭和期の傾向である。JISの成人女子用の衣料のMサイズに身長152～160cm、バスト79～87cm、ウエスト63～69cm、ヒップ85～93cm、と表示してあるように６～８cmの幅がある。ゆったりとしたゆとりの多い和服の寸法とはいえ、大きさ表示に段階をもたせず、一括して表わす標準寸法に幅をもたせるようになったのは、やむを得ないとも、当然ともいえる。しかし、試着衣を縫製するには、一定の基準によって各部位の寸法を決定せざるをえないので、今回は最も自然に考えられる数値として、幅のあるものは、すべてその真中の寸法を採用した。

ここで、割り出し法によって得られたMサイズの仕立上がり寸法と、今回、試着衣を縫製した寸法を比較すると第２表の通りであり、次のようなことが指摘できる。

1） 身丈と衿下の寸法

現在使用しているスタンの頸椎点から床までの高さが140cmあるので、身長160cmとみなしてMサイズの身丈を定めた。従って、標準寸法との差が大きい。これにともない、標準寸法の衿下寸法は短いものが目につく。

2） 裄の寸法

割り出し法の裄は実測によって決められる場合が多く、Mサイズにおいては手首にかかり、長過ぎるものが目立った。標準寸法は布の幅との関係が考慮されたものか、身丈から想像し

第１表　試着衣の仕立上がり寸法（標準寸法）

試着衣 / 名称	I	II	III	IV	V	VI
身丈	150.(cm)	147.5(cm)	150.(cm)	150.(cm)	155.(cm)	157.(cm)
着丈		130.	125.	130.	131.	133.
裄	62.5	61.	63.	62.	63.5	64.
肩幅	30.	29.	31.	30.	31.	31.
衿肩明き	8.7	8.5	8.5	8.5	8.75	8.5
身八つ口	11.	12.5	13.5	13.	15.	14.
前幅	23.	24.5	24.	23.5	21.5	24.
後幅	28.5	28.75	28.	28.5	28.5	29.
抱幅	(20.8)	21.	(20.8)	(21.4)	(21.1)	(23.)
衽幅	15.	15.5	15.	15.	15.	15.
合褄幅	13.5	13.5	13.5	13.5	15.	13.75
衽下がり	23.	21.	20.5	23.	23.	23.
衿下	76.	74.	75.	76.	82.	80.5
袖丈	60.	59.5	60.5	55.	53.	50.
袖つけ	25.	24.	24.	22.5	23.	23.
袖口	23.	23.5	23.	21.	23.	22.5
袖幅	32.5	32.	32.	32.	32.5	33.
衿幅	11.	11.	5.5	5.5	5.5	5.5
繰り越し	0	2.	1.5	2.5	0	2.5

〔備考〕１．衽下がりは肩山からの寸法記載
２．衿肩明きは上がり寸法記載
３．ＩおよびIIは棒衿幅の記述がないので広幅物の½を使用
４．（　）の抱幅寸法は実測寸法記載
５．寸法に幅のあるものはその真中の寸法を採用
６．第３報・第３表の記載漏れ箇所
II塩原式裁縫書…抱幅
III裁縫精義…繰り越し
IV学習指導の研究…肩幅・袖幅

第2表 Mサイズと標準寸法との比較

試着衣 / 名称	I	II	III	IV	V	VI
身丈	−10.(cm)	−7.5(cm)	−15.(cm)	−10.(cm)	−5.(cm)	−3.(cm)
着丈		−5.	−10.	− 5.	−1.8	−2.
裄	− 5.5	−6.5	− 5.	− 3.	−4.5	−4.
肩幅	− 3.	−3.7	− 2.	− 1.5	−2.	−2.
衿肩明き	+ 0.2	−0.8	− 0.8	− 0.2	+0.25	−1.3
身八つ口	− 2.5	−0.5	− 1.5.	+ 0.5		−1.
前幅		−0.7	+ 0.5	+ 1.1	+1.7	+1.5
後幅	+ 0.3	−0.45	− 1.2	+ 0.6	+1.1	+0.9
抱幅	− 2.7		− 2.6		−1.9	+0.6
衽幅	+ 0.6	+0.4	− 0.7	+ 0.1		
合褄幅	+ 0.9	+0.4	− 0.7	+ 0.1		+0.25
衽下がり	− 1.3	+0.4	− 0.5			
衿下	+ 0.4	−3.5	− 6.	− 4.	−1.	−2.5
袖丈	− 3.5	+2.5	− 7.	− 6.2	−0.3	−3.4
袖つけ	− 0.7	−1.	+ 1.	− 0.5		+2.
袖口	− 1.3	+0.5		+ 0.5		−0.5
袖幅	− 2.5	−2.8	− 3.	− 1.5	−2.5	−2.
衿幅	+ 0.2	−0.5	− 0.7			
繰り越し		+1.	− 0.5	− 0.8		−1.1

〔備考〕前回，第3報に掲載した割り出し法によるMサイズの仕立上がり寸法と，標準寸法を比較したもので，Mサイズに対する標準寸法の増減を表わす

て、身長が低かったためか裄の丈が短い。最大差は6.5cm、最少差でも3cmあって、『新被服構成学』の裄64cmが一番長いが、Mサイズの最少のものより1cm短い。

3） 身幅の寸法

後幅、前幅および衽幅の合計がMサイズでは時代とともに狭くなったことを指摘し、これが脇縫におよぼした影響について究明した。各書の標準寸法と比較すると、前期刊行の三書の内『裁縫新教科書』は1cm弱、標準寸法が上回るが、あとの二書は標準寸法の方が狭くなっている。これに対して、後期に刊行された裁縫書の標準寸法には変更があまり見られないの

に、割り出し法によって得られた数値は後幅、前幅ともに小さくなり、その差は『和裁全書』の2.8cmを最大として、いずれも身幅が狭くなっている。

以上のほか、衿肩明き寸法が8.5cmのものが多く、比較的寸法の少ないものが目につく。なお、試着衣縫製に用いた材料は、これまでの実験と同じく、市販の綿100％の縞模様の布を使用している。

4　しるしのつけ方・縫い方

しるしは各書に記述してあるものを基に、これまでの割り出し法によるしるしつけと同様に、衽の衿下などは耳を利用して、省略できるところは省いている。

先の仕立上がり寸法の項で述べたように、Mサイズと標準寸法の差の大きいのは、身丈と身幅および裄である。この比較を端的に表わすために、各書の後身頃のしるしつけを一つに合わせた形で表わしたのが第1図の1と2である。この図によって、標準寸法に対してMサイズが徐々に後幅を狭め、『和裁全書』・『新被服構成学』に至っては、肩幅の広さともあいまって、脇線が直線裁ちの洋服を思わせるような斜線を形成している。また、脇線の縫製の違いによって、『裁縫新教科書』および『裁縫精義』の抱幅が広がりうる可能性を示唆している。

III　着装実験

1　着装条件

6種の試着衣をスタンに着装させるとき、前回、第3報に記載した4点を忠実に守るよう心掛けた。例えば背縫を背中心に合わせ、前面衿の交差位置を頸窩点より3.8cm下がった所に決めるなどである。羽生京子の一連の研究により、直線裁ち衿肩明きの場合、明き寸法が小さい時は繰り越し量は大きい方がよい、という結果が得られている。今回の標準寸法の衿肩明きが8.5cmと、比較的小さいことは先に触れてあるが、この結果が前面交差位置の指定により、着装時の肩山がスタンの肩線より後方に移動しているものが多く、その量もMサイズに比して大である。

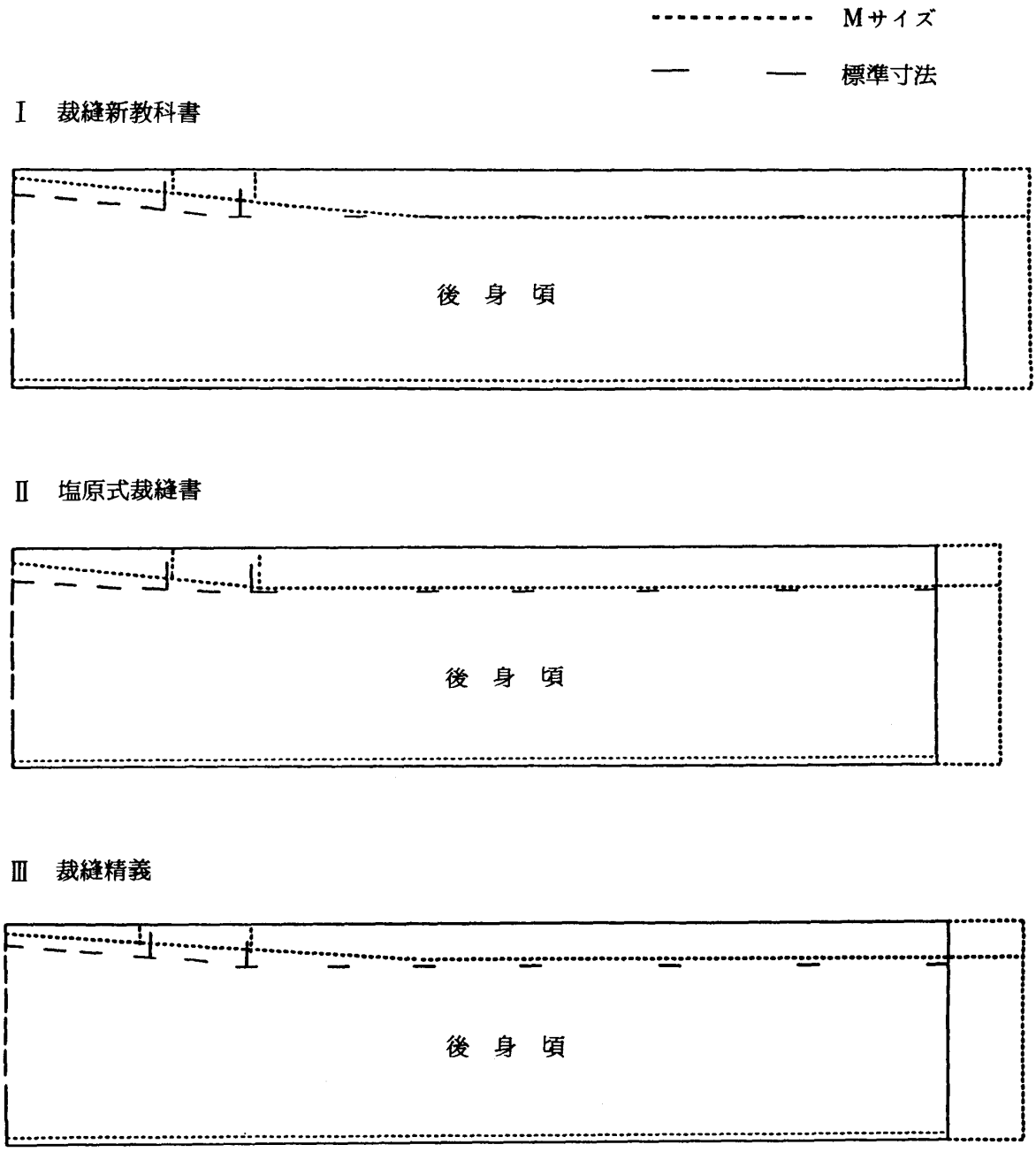
2　実験結果

各試着衣を着装させたスタンを5cm方眼の前に立てて、前面、背面および両側面から撮影したのが第2図である。

1）　各試着衣間の比較

i）　身丈と衿下

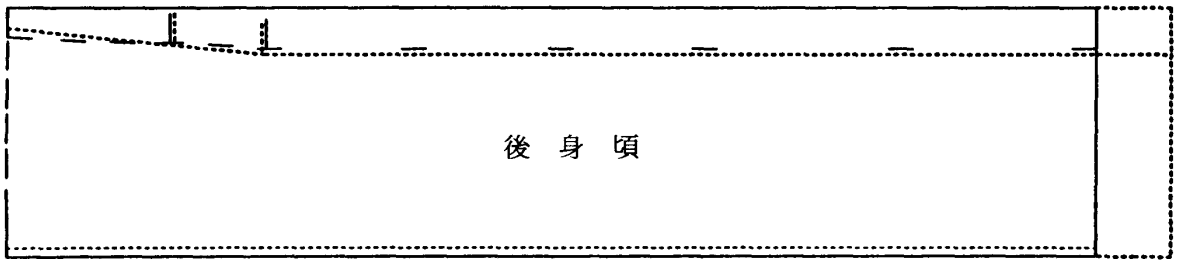
標準寸法の身丈が短いということは、これまでもしばしば指摘してきたが、それでも時代とともに変化し、長くなりつつあることは仕立上がり寸法表からもうかがえる。しかし、前



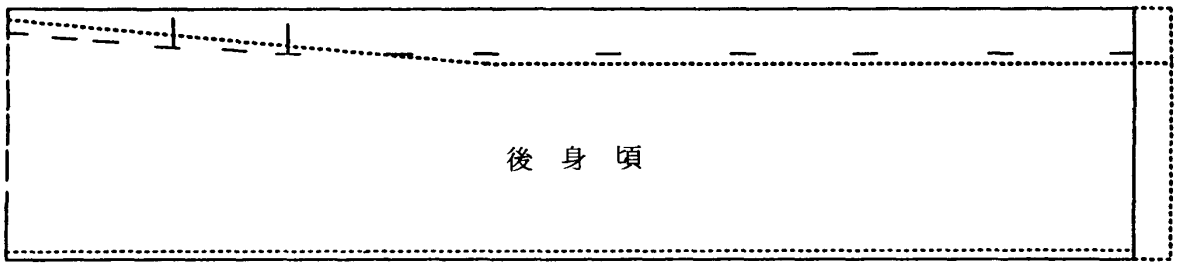
第1—1図 脇じるしつけの比較

面の写真によると、Ⅰ（『裁縫新教科書』）とⅥ（『新被服構成学』）はお端折り量から見て、特にお腹が出ているような感じがない。つまり、身丈はその長さだけではなく、衿肩明き寸法や繰り越し量、衿肩明きの明け方や縫製方法など複雑な要素を含んでいることが示されている。これは衿下寸法にも微妙に影響し、身丈の半分、またはこれに2～4cm加えた寸法になっているにもかかわらず、いずれも、お端折り下より衿先が大きく出ているのが目につく。

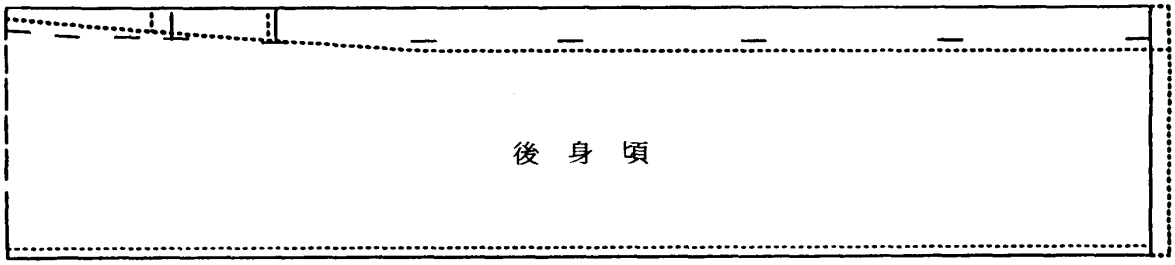
Ⅳ　学習指導の研究



Ⅴ　和裁全書



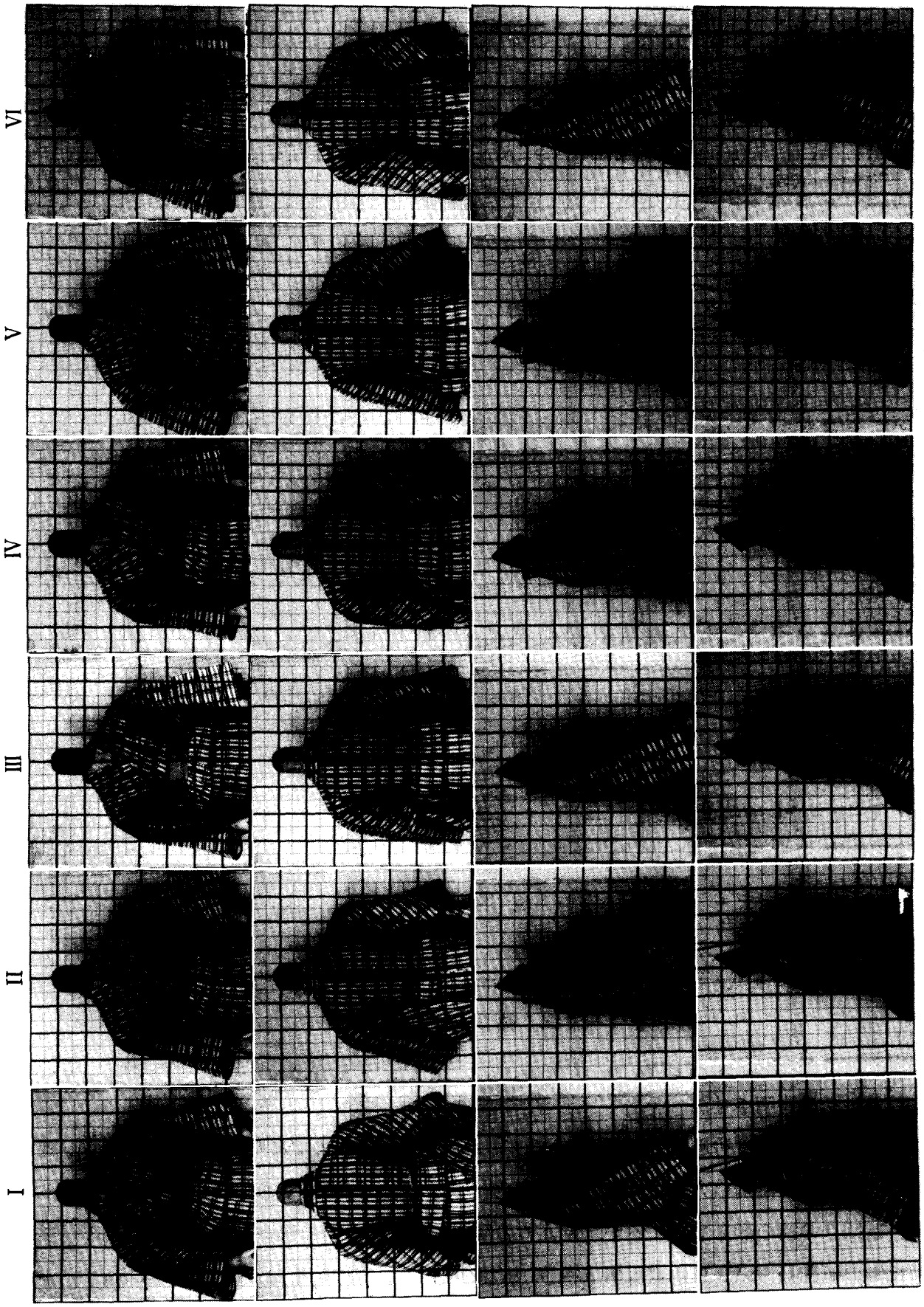
Ⅵ　新被服構成学



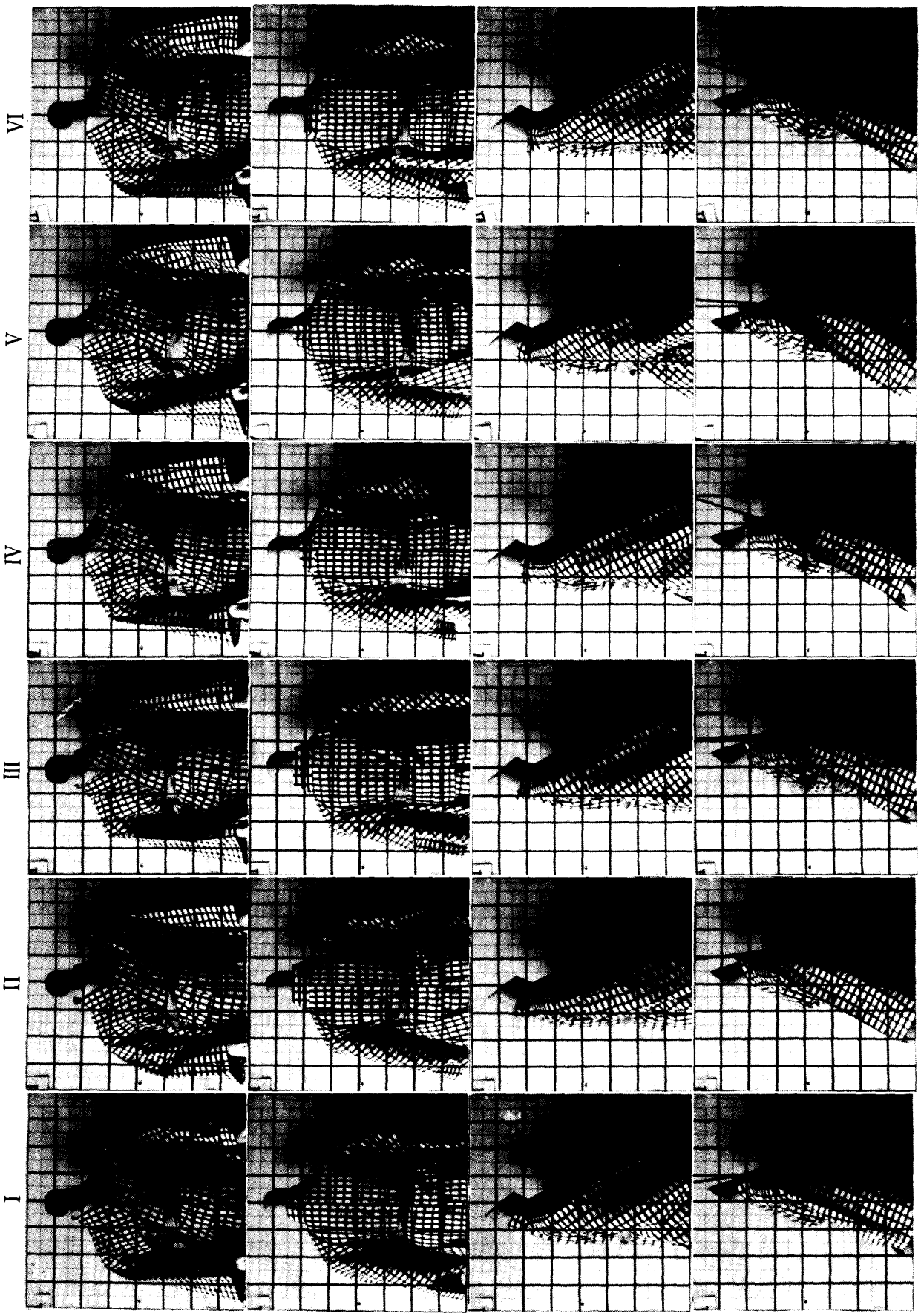
第１－２図　脇じるしつけの比較

ii）　衿肩明き寸法

標準寸法の上がり衿肩の明きが8.5cmのものが、６書中４書まであり、そのいずれもの、繰り越し量や三つ衿縫い方、または衿肩明きの明け方が異なる。こうした幾つかの要因が重なって、首回りの衿の形を形成するが、背面衿の傾斜角度と三つ衿の形が類似している、Ⅳ（『学習指導の研究』）とⅥ（『新被服構成学』）を比較すると、次のようなことが言えよう。



第2図　各書の着装実験　前面，背面，左右側面（標準寸法）



第３図　各書の着装実験　前面，背面，左右側面（Ｍサイズ）

イ　衿肩明きの明け方がIVは直線裁ちであり、VIは曲線裁ちである。

ロ　繰り越し寸法は2.5cmと同じであるが、三つ衿縫代がVIは曲線裁ちであれば当然のことながら1cmであるのに対して、IVは1.5cmとつけ込まれている。IVは衿肩明きが直線裁ちでありながら、衣紋を抜く効果としては、曲線裁ちの持つ特徴を含んでいるといえる。

ハ　羽生京子の第6報[9]、第7報[10]の研究で報告されているように、衿肩明きが曲線の場合は繰り越し量の多い時は明き寸法を大きく、直線の場合は繰り越し量に応じて、明き寸法を小さくするほうがよいとされた。IVは直線裁ちであるから、繰り越し量と三つ衿縫代1.5cmと比較的、肩の厚みが考慮されているので、衿肩明きの寸法が少ない影響が減少している。三つ衿の衿の形もよく、あまり衿が首に巻いている様子もなく、ゆったりと着装され、裄が短いことも、そう感じさせない。これに対して、VIは繰り越し寸法に対して、明き寸法が小さいことが明らかで、衿が首に巻きつき、頸側点から衿つけ線までの距離が少なく、裄がIVより2cm長いにもかかわらず、短いようにさえ見える。

2）　Mサイズとの比較

今回の研究のもう一つの目的がMサイズとの比較にあるので、第3図として、前報第2図に掲載した試着衣の写真を再び示して、標準型との比較を行い、問題点を列挙しておく。

i）　身丈はお端折り量にかかわることで、身長に比例しなければらない。

ii）　衿下寸法は着装時の腰紐位置によるが、お端折り量との関係も深く、身丈との連係を考慮しなければらない。

iii）　標準型の裄寸法が比較的短いのは、写真で観察しても判然としているが、実測を利用することには問題がある。

iv）　身幅はMサイズの折りにも触れたように、平面構成の持つ許容性により、相当量の違いは、腰囲りには影響しないように思われる。しかし、これが肩幅との関係、ひいては裄との関連を配慮した場合は大きい影響力を持つ。

v）　写真から割り出し法による試着衣と標準寸法によるものと、類似して見えるのはIVの『学習指導の研究』である。

IV　まとめ

以上、これまでの研究において、各種の割り出し法によって、体型の異った人々に適した和服を作製する方法を追究し、また、標準寸法によるものとの比較も一応試みた。ただ、現

代人の一番特徴とされる、背は高く、極端にやせている人に対する割り出し法による試着衣の実験が諸般の事情から、現段階では実現できないのが残念である。いずれ、実際の学生を対象として実験を進めるとき、是非行って見たいと思っている。しかし、標準型のスタンを利用してのMサイズの実験結果によって、ある程度の感触が得られ、幾つかの示唆は把握しうるものと考えられる。

そこで、本研究の目的である誰にでも容易な採寸、出来るだけいかなる体型にも適した妥当性のある割り出し法を、各書、各部位を通して想定して実験を重ねたい。例えば『学習指導の研究』で裄は着丈の２分の１より２～３cm減としている。ここでは65cmであり、着丈136cmの２分の１より３cm減じて設定しており、比較的計算しやすく、現在のところ、写真判定によっても良好と見られる。そして、着丈は身長の10分の8.5としていて、実測とあまり変りない数値を得ている。これは一例であるが、このように各書の割り出し法を各部位で比較検討して、いかなる体型にも通用する割り出し法が把握できることを期待している。

〔付記〕

本研究を作製するにあたって、永野順子教授のご指導をいただき、和裁研究室の羽生京子講師、山科みどり氏、伊藤瑞香氏のご協力をえた。

引用文献

1）仲村洋子：和洋女子大学紀要　28　家政系編　P 93～103　1988
2）共立女子職業学校桜友会裁縫研究部：増訂裁縫新教科書　メートル法適用　大日本図書株式会社　1926　上P 46～49　下P 2
3）塩原千代子：塩原式裁縫書　メートル法併記　神戸女子高等技芸学校裁縫研究部　1930　P 99～120、199～210
4）奈良女子高等師範学校裁縫研究会：裁縫精義　基礎及び単衣編　東洋図書株式合資会社　1936　P 45、113～142
5）成田順：家庭科　学習指導の研究　被服Ⅰ編　教育図書株式会社　1973　P 300～307、316
6）主婦の友社：最新和裁全書　主婦の友社　1981　P 191～199、218～231
7）阪本弘子：新被服構成学　相川書房　1984　P 64～74
8）大学・短期大学和服研究会：現代の和服　相川書房　1985　P 23～28、36～60
9）羽生京子：和洋女子大学紀要　28　家政系編　P 83～92　1988
10）羽生京子：和洋女子大学紀要　29　家政系編　掲載予定

（本学専任講師）